

見て、感じて、考へる

福岡県立福岡中央高校教諭 占 部 賢 志

一、対象喪失

- (1) 高校生との交流を通して
- (2) 自己を知るといふことの意味について

二、「人間は、世界を幻のやうに見る」といふことについて

- (1) 矮小化された日本像
- (2) 「第二現実」の問題

三、国家・個人・言葉

- (1) 吉田松陰遺文「留魂録」
- (2) 大東亜戦争終結時に遺された言葉

四、青年期の学問とその行方

(1)

ある秋の夕方お邪魔したときには、虫の声がしきりにきこえていた。そのとき津田さんはしみじみとした調子でいわれた。じっくりとしばらく本が読んでみたい。

あなたは年中読書していられるじゃないですかとわたしがいうと、いや、本を読んでも、何か材料(材)をサイといわれるのがくせだ(に)しようと思つて読んでるんで、まるで、守銭奴が金をためようとするのと同じだ。そんな気持ちでなくて、本が読みたいと思ふんだということであつた。

そのうちに、今ないている虫の名を、君知ってますかときかれたが、わたしは、気分がおちついていけば、可愛い声でないかと思ふし、でないときには気にもとめません、ですから、虫の名前などに興味はもちませんと答えた。

すると津田さんがいわれるには、鈴虫とか松虫という名は、どうも時代によって名前があべこべであつたらしい。自分は虫の声をきいても、あれは何という虫だろうかと気になるし、時代によって名前がちがうと、王朝時代では何といつたかと調べてみたくなる。虫をきいて、虫の声だけに興味があるというのが羨ましい。こんな調子だから、本を読んでも、ほんとうの読書にならないんだといわれた。 原随園「津田博士の読書」

(2)

最近ある試験答案の採点をする機会があり、その際ちょっと驚かされることがあつた。戦前の大日本帝国憲法下の日本の政治がとんでもなくひどいものであつた、法治主義すらないような、そんなトーンで書かれていることはいつものことで、そう驚かなかつたが、その中の枢密院の役割についての理解はやや異常であつた。

実はその問題の解答にとって枢密院は必ずしも決定的に重要な意味をもつものではなかつた。ところがなおよそ半数以上の人が枢密院の役割を極めて重大なものとして採り上げていた。その上その多くは枢密院が内閣首班の推薦にかかわつたとしていた。当初は、枢密院は高校の教科書にもあまり出てこないのだからどうしてこんなに出てくるのかといふが、しかし同時にくわしい説明がないのだからいろいろの誤解も生じたのだからと思つた。しかし、その数があまりにも多いので、これには何かはつきりした原因があるのではないだろうかと思ふ。これには何かはつきりした原因があるのではないだろうかと思ふ。これには何かはつきりした原因があるのではないだろうかと思ふ。

伊藤隆「大学入試答案を讀んで」

(3)

歴史を解釈するとき、まずある大前提となる原理をたてて、そこから下へ下へと具体的現象の説明に及ぶ行き方は、あやまりである。歴史を、ある先験的な原理の図式的な展開として、論理の操作によってひろげてゆくことはできない。このような「上からの演繹」は、かならずまちがった結論へと導く。事実につきあたるとそれを歪めてしまう。事実をこの図式に合致したものとして理解すべく、都合のいいもののみをとりあげて都合のわるいものは棄てる。そして、「かくあるはずである。故に、かくある。もしそうでない事実があるなら、それは非科学的であるから、事実の方がまちがっている」という。

「上からの演繹」は、歴史をその根本の発生因と想定されたものにしたがつて体制化すべく、さまざまの論理を縦横に駆使する。そして、かくして成立した歴史像をその論理の権威の故に正しい、とする。しかし、そこに用いられている論理は、多くの場合にはなほ杜撰なものである。

（竹山道雄著「昭和の精神史」）

1885(明治18)年12月、日本において近代的内閣制度が制定され、第1次伊藤内閣が発足して以来、1947(昭和22)年5月、大日本帝国憲法に代って日本国憲法が施行され、第1次吉田内閣が退陣するまで、1代の内閣(同一の首相が連続して内閣を組織した場合は1代として数える。以下同じ)の平均存続期間は約1年5カ月であつた。これは、日本国憲法の時代における1代の内閣存続期間が約2年9カ月(1980年7月の大平内閣総辞職まで)であるのに較べると、いちじるしく短い。

帝国憲法の時代(内閣制度制定以後憲法公布までを含む)の内閣がこのように短命であつたのは、いかなる理由によるものと考えられるか。帝国憲法のもとの政治制度の特色に即して、その理由を200字以内(句読点も1字に数える)で説明せよ。

(4)

留魂録

身はたとひ武蔵の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂
朽ぬも留置まし大和魂
十月念五。 二十一回猛士

かきつけ終りて後

心なることの種々かき置きぬ思い残せることなかりけり
呼びたしの聲まつ外に今の世に待つべき事のなかりけるかな
討たれたる吾れをあらはれと見ん人は君を崇めて夷拂へよ
愚かなる吾れをも友とめづ人はわがとも友とめてよ人々
七たびも生きかへりつつ夷をぞ襲はんころ吾れ忘れぬや。

身はたとひ武蔵の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂
十月念五日 二十一回猛士

かきつけ終りて後

心なることの種々かき置きぬ思い残せることなかりけり
呼びたしの聲まつ外に今の世に待つべき事のなかりけるかな
討たれたる吾れをあらはれと見ん人は君を崇めて夷拂へよ
愚かなる吾れをも友とめづ人はわがとも友とめてよ人々
七たびも生きかへりつつ夷をぞ襲はんころ吾れ忘れぬや。

十月二十六日黄昏昏す 二十一回猛士

(5)

昭和二十年八月十四日、夜の十一時すぎ、ようやく終戦の詔書發給の手続きをす
べて完了して、疲れた鈴木老首相と追水書記官長が首相公室に坐っていた。そこに
阿南陸相が入ってきた。彼は直立不動して敬礼して、言った。「私は陸軍の意見を代
表して、これまでいろいろと強硬な意見を申し上げ、総理にはご迷惑をかけたこと
と思ひ、ここに謹んでお詫びを申し上げます。……私の真意は一にかかつて國体を
護持せんとするにありしたのでありまして、あえて他意を抱いたものではございませ
ん。この点は何卒ご理解下さいませように」

首相は陸相の肩に手を置いて、いたわるように言った。「そのことはよく解ってお
ります。……みな國を思う誠の情から出たものです。しかし、阿南さん、日本の皇
室は絶対にご安泰ですよ。今上陛下は春と秋のご祖先のお祭りを必ずご自身で熱
心になさっておられるのですから」

阿南氏は両頬に涙を伝わらせながら、「私もそう信じます」。

陸相が退去した後、首相は言った。「阿南君は暇乞いにくたのだね」

この胸をうつ場面は次のようなことを意味しているのではないだろうか。——こ
こに言われている國体とは、祖先の祭りをを行う天皇を中心として結集した民族的形
態である。これは外から強制されたものではなく、各人の胸に内発して宿っている
集團感情である。歴史の中に成立した國民的個性であり、共同体への帰属意識とい
う人間の本然の願いを、もっとも強烈に堅固にみたしたものだ。

竹山道雄著「歴史の意識について」

(6)

「晴天、風なし。夜更けて風あり。○婚礼也。午の刻、新婦到着……」

人生において、或る一つのことが存在したら、それがすぐ反射的に何かのことにあらわれてくる
というものではありません。しかし人間が青年時代に受けた心の傷とか、青年時代に抱いた願
いとか、あるいは決意とかは、或る能力をもった人間にとってはその生存の底のほうでその人間の支
えになるのです。おそらく大塚備膳子という女性との出会い、失恋という痛手を認めずには夏目漱
石のあの三角關係を主題とする作品群を理解できないのではないかと。

それと同じように、言葉の学問をする学者を理解する場合にも、その学問の結果を吟味する場合
にも、学者が青年期に心にどんな傷を受けたか、どんな願いを抱いたかを見なければならぬでし
ょう。

学問とは大きな事実の集積に耐えて、一人の人間がその重圧の中で、歴大な事実を貫徹する一つ
の筋道を見出して行く作業です。それは、細かい事実を洩らさない心づかいと、多くの雜然たる事
實に蔽われている論理を見抜く透明な精神の活動とによって成り立つものですが、その事実を築め
たり、あるいは推理を働かせたりする作業は、ただ風が吹いてきて木の葉がたまったというように
出来上るものではないのです。やっぱり一人の人間がいて、その人間が努力を続けて成すことです。
それは人を好きになったり、きらいになったり、あるいはお金がなくて困ったり、あるいは國を救
いたいと願ったりする一個の人間のすることです。学問とは、そういう人間が、青年期に自分に對
して荷物として課したものを運びきろうとして努力を重ねて成しとげることであり、あるいはまた、
青年期に自分の中に傷として受けたことを癒そうとし、あるいは傷を淨化しようとして、さまざま
な形を与えて世の中に現わして行く制作物であるのです。学問とはただ風が吹いてきてほこりが立
ちのぼったとか、木の葉の吹きだまりができたというものではなく、また、やみくもに努力したら
できましたとかいうものでもない。努力ももちろん入り用なものですけれども、努力の形づけの基礎
になる傷やら基本的な願いやらがある。その傷が何であったか、願いが何であったかを理解しない
と学問が人間と結びついてこないでしょう。

大野晋著「語学と文学の間——本居宣長の場合——」